

もうひとつの「開発」

東京大学先端科学技術研究センター

所長・教授

西村 幸夫 (にしむら ゆきお)

日本地域開発センター50周年の記念すべき節目にあたり、もういちど「開発」とは何かといういささか青臭い原点論を考えてみたい。

拠点開発や国土の均衡ある発展という過去の定型的な表現における「開発」とは、地域の社会インフラが一定程度整い、各種サービスが一定水準に保たれ、地域経済が活力を保持していけるような施策を講じることであることは自明である。加えて近年では、国際的な視点での地域戦略や減災体制の強化などの項目にも注意が払われるようになってきた。

もちろんこれらの論点は今日においてもいずれも重要なものではあるが、そこにはいくつかの無

言の前提とでも言うべきものがあるように見える。——それぞれの地域が一定の生活・環境サービスを享受できるようにするという共通の目標設定や計測可能なメルクマールの設定などであり、モノの操作中心主義である。さらにそのまた基礎には、明日は今日よりも物的に進歩しているという途上国的な進歩史観がある。誤解を恐れずに言うと、無から有が生み出していくことに「開発」の神髄があったといえる。

もちろん無から有を生産していくことは今後とも地域における重要な営みのひとつであることは疑いが無いが、それだけではあまりにも今あるものを資産として活かしてゆくという姿勢、有を大切に作る姿勢が欠けていたといわざるを得ない。

そこで、現在あるものを起点に「開発」を考えてみたい。そうすると、どのような発想の転換が起きるだろうか。

それぞれの地域に現在あるものを資産と考えると、そうした資産は、当然のことながら地域ごとに異なっている。それが地域の個性というものである。とすると、そこでは、地域をまたいでフラットに比較考量する諸指標というものはほとんど意味を持たないことになる。

観光がいちばんわかりやすい例ではあるが、それ以外にも祭礼や食文化のように地域における生活満足度を高めることに貢献している地域資産というものは各地に存在している。こうした地域の底力は従来型の地域開発の発想ではなかなか捉えがたい。

山林などの地域資源も同様である。日本は動物相においても植物相においても世界のホットスポットというべき生物多様性が際だった地域であるが、こうした視点から地域の資源を考えると、これまでの開発論では見えてこない風景が現れるだろう。

近年話題の里山についても、人間社会との関係で自然を取り上げると、その関与の多様性を地域ごとに色づけするならば、これまで過疎地と呼ばれていたところにこそ、一番の宝が眠っていることになる。同様に、農業を今後の先端産業あるい

は自給型産業のいずれだと捉えたとしても、その可能性は条件不利地域こそ高いと言える。そこはまた民俗文化の宝庫なのである。

こうした視点で地域を考えると、都市と農村の二地域居住を誰もがしたくなるに違いない。その時、現有の資源を基盤として、都市と農村とが同時に維持可能となる。その時、日本には魅力的な、そして同時になつかしい未来が訪れるだろう。こうした豊かなライフスタイルを、将来、アジアの友人たちと共有していくとすると、日本にはさらに豊かな未来が待っていることになる。

こうした地域像を描くことも立派な「開発」ではないだろうか。設立50周年にあたり、今後の50年はこのような方向性を追究していくのも地域開発のあり方のひとつではないかと愚考している。